

## 「インドネシア大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学大学院文学研究科修士1年 神田今日子

2018年2月～3月のインドネシア大学スプリングスクールについて、参加しての学習成果、海外での経験、プログラム内容、進路への影響について報告する。

## ①学習成果

学習成果で一番大きかったのは、インドネシア大学（UI）の学生と行動を共にしてたくさん話をしたことだ。日本とインドネシアの似ているところも違うところもたくさん発見できた。

受け入れてくれたのが日本学科の学生なので、みな日本の文化・歴史・政治に詳しく、日本語も堪能で、日本語で日本について話していると外国にいる気がしなかった。みなとても謙虚で集団になると優柔不断になる行動パターンも日本と似ていると思った。

一方で、もちろん、インドネシアの社会はさまざまな面で日本とは違う。また、学生たちが、自分たちの社会の成り立ちや状況について自覚的で、社会や宗教や国家について自分の考えを持っている人が多い点も、日本と違うと感じた。私はインドネシアの多民族・多言語の状況に興味を持っていたので、UIの学生にいろいろと聞いてみたが、自分はなに人か、母語はなに語か、どんなときに話すか、みなしっかり答えてくれた。また、礼拝やヒジャブや食事などのイスラムの習慣についても、一般的な知識と自分の立場をわかりやすく教えてくれ、イスラム教がインドネシアの生活に根ざしていることと、ムスリムの中でも教えに対する態度が非常に多様であることの両方を感じられた。

共同発表準備では、考えの深めかたやコアアイデアを掴むプロセスに関してとても刺激を受けた。私たちのテーマは「お葬式」で、身近な文化比較から議論を始めることになったのだが、そのときにバディのユリウスくんが言ったことが、最終的に発表の核になった。インドネシアではお葬式の様式が宗教・民族・地域によって非常に多様、でも何か *benang merah*（赤い糸：一貫した筋道）があるんじゃないか、ということだった。その後、その文化の背景には、またその奥には…、とディスカッションを深める中で、当初思ってもみなかった要因を引き出すことができ、それを整理することで私たちなりの *benang merah* を提示できたと思う。切れ者で博識なユリウスくんの思考を、私が話しながらアシストし、絵に起こして整理していくという感じで、それぞれの得意技をシェアして作り上げる感覚がとても楽しく、爽快だった。自分でもフル回転で考えつつ、相手の頭も借りて論理を導く過程を体験できて、とても勉強になったし、これからも活かせると思った。

## ②海外での経験

授業のない土曜日にジャカルタに観光に出かけ、インドネシア銀行博物館に行ったとき、1998年5月のジャカルタ暴動の展示室でUIの学生たちが立ち止まって、熱心に話をしていた。今の大学生が生まれた頃に起こった事件だが、そのときの状況や前後の経緯、市民が何を知っていて何を知らないか、などを、整理してわかりやすく教えてくれた。当事者意識を持ちながらも客観的な情報のソースを示して話すこと、みなで自国の現代史について建設的に話し合うことができる様子を目の当たりにして、感心した。

## ③プログラム内容

平日は毎日9時から16時まで授業がある。午前中はインドネシア語の授業が2コマあり、3人の講師が1コマごとに交代して担当してくれる。授業はインドネシア語で行われる。午後は日本学科の学生が受けている人文・社会科学系の講義に参加したり、文化体験をしたりする。文化体験の内容は、アルンバ（竹製の木琴のような伝統楽器）、ガムラン（大きささまざまな鐘で音階を奏でる伝統楽器音楽）、パティック作り（伝統的な織物の染色体験）。プログラムのある2月後半は、UIでは後期（2月～）の学期中なので、他の授業も多数行われていて、キャンパスは賑やかだ。16時からUIの学生と2人1組で共同発表の準備をする。発表のバディたちに加え、本プログラムOB・OGの学生も、学科の行事や就活や卒論で忙しいなか顔を出してほとんど常に誰かが一緒に行動してくれた。

## ④進路への影響

今後もインドネシア語の勉強は続けようと考えており、留学などでインドネシアを再訪することがあるかもしれない。いずれにせよ、今回できたUIの学生とのつながりは今後も大事にしようと思う。